

黄金まき岩



「篠栗村の境内也。其境内也。其川上谷の奥也。此谷をのぼれば、嶺に糟屋と穂波郡との境あり。嶺より東は穂波郡八木山村也。むかし山賊此所にて山伏を切殺し、其

と号す。(後略)」この山伏谷には篠栗四国霊場の第三十四番札所(紅葉滝宝山寺)があり、境内には「黄金まき岩」といわれる大岩があります。

次のお話は、『紅葉滝宝山寺縁起』によるものです。

この山伏谷は、難所である八木山峠へ登る谷で、昔は山賊がよく現れ

多くの旅人を襲い、彼らの持っていた物品やお金、さらには尊い命までも奪っていました。

天文23(1554)年、宗像の領主である氏貞公の後室が、増福院での供養祈祷のために英彦山から山伏法師一行を招き、その供養料として莫大な献上金が託されました。英彦山への帰路の途中、篠栗村の八木山峠でこのお金を狙った山賊が山伏法師一行をこの峠の谷間で襲いました。山伏一行は、山賊と必死になつて戦いましたが、多くの山伏は身ぐるみをはがされて殺されてしまいました。

しかし山伏の一人は、深手を負いながらも谷から北側の山腹にある現在の宝山寺のあるところまでたどり着き、そばにある大岩まで登つたところ

で力つき、ついには山賊に追いつかれてしまいました。そこでその山伏は最後の力を使い、『宗像公からいただいた大切な献上金をなんでお前達に奪われようか。南無英彦山権現受け取ってください』と言いながら、持つていたお金を全部英彦山方角に向かつてばらまきました。すると不思議なことに、そのお金は木の葉のように風に吹かれて英彦山の方へ飛んで行きました。

それ以降、その大岩を「黄金まき岩」と呼ぶようになった。歴史民俗資料室

元禄16(1703)年に書き上げられた『筑前國統風土記』の「山伏谷」に、

持たる物を奪ぬ。しかるに彼山伏の靈魂崇をなし、行かふ人の目にも見えるとかや。故に山伏谷